別紙 4

報告番号	※　　第　　号

主　論　文　の　要　旨

論文題目　現代中国語の“让”構文における意味的連鎖の形成

氏　　名　高　謙

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、現代中国語の“让”構文を考察の対象とし、“让”構文の文法化現象が反映された「授与－使役－受身」という意味的連鎖の形成過程及びその変化を誘発した動機付けの解明を目指すものである。

“让”構文は、以下の例（1）のように“N_1＋让＋N_2＋VP/AP”を基幹構造として表され、実際の文脈の中では、訳文例（1a）（1b）（1c）のように、その意味は「授与」、「使役」、「受身」の範疇にまたがって捉えられる。本研究では、“让”構文がこのような複数の意味・機能を兼用するに至った原因及び“让”構文の言語変化を支えるメカニズムについて考察する。

（1）　那些苹果呀，都让我老妈吃了。

a.［あれらのリンゴはね、お母さんに食べてもらうよう全部譲った。］　【授与】

b.［あれらのリンゴはね、お母さんに全部食べさせた。］　【使役】

c.［あれらのリンゴはね、お母さんに全部食べられてしまった。］　【受身】

本研究では、上で述べた研究目的を明らかにするために、次の三つの論点に基づいてそれぞれ検討した。

論点 1）“让”構文は如何に変化してきたか。

論点 2）“让”構文は何故変化したか。

論点 3）“让”構文は何故このように変化したか。

このうち、論点 1）に関しては “让”構文の各用法に関して、それらの文法的特徴と機能を記述した。その上で、各用法の間に見られる継承関係を考察し、“让”構文が変化する方向性とルートを明らかにした。

論点 2）に関しては、“让”構文が古い用法から新しい用法へと変化する過程に注目し、それぞ

れの変化現象を誘発した動機付けについて考察した。

論点 3）に関しては、本研究で取り上げた“让”構文の言語変化における個別事例を総括し、“让”構文全体の変化を制約する要素と要因について検討することを通じて、“让”構文に見られる変化現象の全体像を論じた。

言語の変化現象を論じる場合、古典文の言語資料を列挙しながら、その出現や発展、定着段階の順に基づいて分析する通時的研究が従来の主な手法であった。これに対して、本研究ではこのような線形的記述（linear narrative）ではなく、“让”構文に見られる二つの重要な局部的現象、つまり、使役範疇内の分化と使役から受身への範疇間の拡張を取り上げることで、それらが変化する動機付けを究明した。次に、分析視点を“让”構文全体の変化現象に再び戻し、通時的な言語資料に基づいて、“让”構文の変化現象の全体的な傾向を明らかにした。

通時的な言語資料に基づき、意味的側面に重点を置いた先行研究に対して、本研究は「言語は形式と意味の結合体である」（Bolinger1977：x）を基本的な立場として、“让”構文の文法化現象を引き起こした生成環境とその動機付け、及び変化過程を追究した。“让”構文の意味・機能が変化する順序については、これまでの通時的研究によりすでに明らかにされてきた。本研究ではこれに基づき、“让”構文に変化を誘発した原因と理由について重点的に記述し、変化過程における必然性と法則性を明らかにした。

第 1 章と第 2 章では、主に論点 1）2）に基づき、“让”構文における各使役の基本用法や関連、及び使役から受身へ拡張した原因について詳述し、第 3 章における考察の基盤とした。そして、第 3 章では、論点 3）に基づいて“让”構文の変化現象の形成と束縛について検討し、構文全体の視点から第 1 章、第 2 章における結論の妥当性を再検証した。

本研究の構成及び各章の要旨は次の通りである。

序章では、本研究の目的と意義を提起し、論構成と各章の課題について述べた。

第 1 章では、現代中国語の“让”構文が表す使役範疇を中心に、意味に基づいて分類を行った。また、文構成の角度から分類の妥当性を検証し、その意味と形式の結びつきを明らかにした。

本章ではまず先行研究に基づいて、主に共時的観点から、現代中国語における“让”の使役義を「許可使役」、「指示使役」、「放任使役」、「誘発使役」の四つの下位類に分類した。また、この四つの下位類の意味特徴や文成分の性質及び因果関係を考察し、その「一般化」（generalization）のプロセスについて論じた。“让”構文が拡張するプロセスには、当該構造における使役者 N_1、使役マーカー“让”、被使役者 N_2、述語句 VP/AP といった文成分だけではなく、各文成分の使用範疇及びそれらの相互作用、使役事態とアスペクトの関係といった様々な要素が関わっている。本章では、使役文の分類を中心に各種使役の機能を定義し、その統語的・意味的特徴を抽出した。併せて、各使役文の文成分における性質の比較を通じて、本章で提示した四タイプの下位類は互いに区別されるものの、連続的に繋がっていることを論証した。

次に、各種使役文に否定副詞を加え、使役文との共起関係を検討した。その上で、それぞれの使役タイプにおける“让”構文の間にどのような文法的差異があるのかを観察し、各使役文における意味と形式の対応関係を再考した。

第 2 章では、“让”構文が使役から受身へと拡張する原因とプロセス及び動機付けを追究した。

本章ではまず“让”構文が表す使役義と受身義の意味的類似点について考察し、当該構文が受身義を獲得する意味的基礎を明らかにした。一般的に、中国語の受身文は［動作対象 N_1 が動作主 N_2 からの動作 V を受けて被害にあった］ことを表す例が多い。つまり、N_1 にとって N_2 が動作 V を行うことは望ましくないことではあるが、それに抵抗せず、消極的に受け止めること（ないしは、消極的に受け止めざるを得ないこと）を表す。これに対して、“让”構文が表す「許可使役」と「放任使役」は、被使役者 N_2 が自ら動作 V を実行するという性質があり、使役者 N_1 はそれに対して［阻止せず、何もしない］という性質を有している。本章では、この「N_2 自らの動作 V に対して、N_1 は何もしない」という特徴が使役義と受身義の意味的な類似点であると主張した。

Hopper・Traugott 1993：68 は、変化した言語項目の原義と新しい意味の間に意味的類似点があることは言語の意味と機能が拡張する必要条件であるが、明らかな形式的相違点こそが変化した意味が定着する動機付けであると述べている。上述の意味的な類似点についての分析を踏まえ、「許可使役」、「放任使役」、「受身」の順に“让”の使役文と受身文の形式的相違点と共通点を抽出した結果、V の補語及び N_1 の述語機能を兼用する成分（CP_1）が義務的に要求されるか否か、つまり、CP_1 の有無が両者に関して最も顕著な形式的相違点であることを指摘した。そして、この CP_1 こそが“让”構文が受身機能を獲得する形式的動機付けであることを主張した。

第 3 章では、“让”構文の形成と拡張過程を全面的に論じ、その構文的特徴をまとめた。

本研究の考察対象である“让”構文は、“N_1＋让＋N_2＋VP/AP”という基幹構造を通じて「授与」、「使役」、「受身」のいずれも表すことができる。当然のことながらこれらは異なる文法範疇に属し、“让”構文が示す内部構成もそれぞれ異なる。マーカー“让”は様々な意味や機能を担えるが、これは言語変化した結果であり、“让”と共起する他の文成分（N_1、N_2、VP/AP）や文脈、使用環境こそが言語変化を引き起こした主な要因であると考える。本章では“让”の構文全体の変化を俯瞰し、“让”構文の文法化過程における「不変要素」と「変化要素」を中心に考察した。“让”構文が表す「授与義」、「使役義」、「受身義」はいずれも“N_1＋让＋N_2＋VP/AP”形式によって示されるが、これは上記の意味的連鎖が生成した文法的環境であり、「不変要素」である。これに対して、文末述語成分による使用範疇の拡大や複合構造の定着などに伴い、“让”自身の意味や品詞、文中の名詞性成分（N_1、N_2）の使用範疇、構文自体の主観性などが変化を遂げた。これは“让”構文の文法化過程における「変化要素」である。前者は独立変数（independent variable）であり、後者はそれによる従属変数（dependent variable）だと考えられる。

第 4 章では、“让”構文の言語変化を概観し、その変化現象に影響を与える原因とメカニズムに

ついて考察することを通じて、本研究の“让”構文に対する言語変化観を概括した。

“让”構文の言語変化現象に関するこれまでの先行研究は、変化した現象のみを取り上げ、重点的に記述しているが、変化しなかった要素に関心を払う論述は少ない。文法化が起こる際、「変化」と「不変」の二つの側面は常に見られる現象であるが、「変化」は動態的で有標的な事象であるため認識されやすいのに対し、「不変」は静態的で背景化されやすい。「変化」と共存しているため、「不変」は言語変化現象の一側面として意識的に捉えられるべきである。それ故、“让”構文の言語変化現象を論じる際には、変化した要素・要因に加え、変化しなかった要素・要因は何か、なぜ変化しなかったか、変化しなかった要素・要因はどのように変化現象を制限し、誘導したかなどについても解明しなければならない。本章では、このような言語変化観に基づいて、“让”構文に関する各段階の変化現象を再考察し、それらが反映している変動傾向と必然性を明らかにした。

終章では、本研究で究明した論点を総括し、“让”構文の意味的連鎖と変化のルートについて本研究の結論を述べた。

“让”構文の構造は単一的ではあるが、実際には複数の文法範疇をカバーしている。「授与」、「使役」、「受身」の三つの文法機能は、同一の形式“N_1＋让＋N_2＋VP/AP”によって表され、各範疇間には継承関係が認められる。すなわち、「授与」、「使役」、「受身」を表す“让”構文の形式と意味の間には連続性と段階性が見られるため、三者間の拡張ルートは不可逆的であると言える。本研究では“让”構文の言語変化現象を中心に、その体系化と精緻化を目指してきたが、考察を通じて明らかとなった「授与－使役－受身」の継承リンクは、現代中国語の“让”構文に限られたものではなく、方言や各国の言語にも多く見られることから、人間の認知的活動に深く関わっていることが窺われる。この点において、本研究の成果は“让”構文の個別的な事象研究としてだけでなく、一般言語学や類型論研究、言語と人間の認知的活動に関する研究へのフィードバックも期待され得る。